



鮮烈な赤い壁に映える青いネームプレートが、無言で会社の先進性を物語ってくれます。



前面に遮る物のないデスク・レイアウトは、視界が開け前頭葉を心地よく活性化してくれます。

喫茶店に集まっては、朝から晩まで会議をして構想を練り上げてきた時期も遂に終わりを告げ、いよいよ自分たちの本拠地を作ることが間近に見えた昨年末、松永先生にご報告と事務所の設計・施行をお願いしに伺いましたが、わずか1ヶ月しか時間的な猶予がないなか、事務所取得や整備のための資金繰りと工事作業を同時並行で進めていき、出版社との約束期限ぎりぎりに入所できることになり、予定どおりに事業開始の準備を進めることができました。

私の夢が、20数年の時を隔てて実現へと向い始める確かな予感がし、一気に加速させて資本やインフラ、人材などを充実することに専念しながら、気がつくると壮大な事業構想と提携先パートナー、資金提供などに恵まれていきました。

奇跡とも言えるような出来事が次々と起こり、同時に反作用とも言える力も働きましたが、いつの間にか、すべてが順調に進んでいく現実には、私たち全員が目に見えない何かに護られているような感覚に包まれていたと思います。

喫茶店に集まっては、朝から晩まで会議をして構想を練り上げてきた時期も遂に終わりを告げ、いよいよ自分たちの本拠地を作ることが間近に見えた昨年末、松永先生にご報告と事務所の設計・施行をお願いしに伺いましたが、わずか1ヶ月しか時間的な猶予がないなか、事務所取得や整備のための資金繰りと工事作業を同時並行で進めていき、出版社との約束期限ぎりぎりに入所できることになり、予定どおりに事業開始の準備を進めることができました。

私の夢が、20数年の時を隔てて実現へと向い始める確かな予感がし、一気に加速させて資本やインフラ、人材などを充実することに専念しながら、気がつくると壮大な事業構想と提携先パートナー、資金提供などに恵まれていきました。

奇跡とも言えるような出来事が次々と起こり、同時に反作用とも言える力も働きましたが、いつの間にか、すべてが順調に進んでいく現実には、私たち全員が目に見えない何かに護られているような感覚に包まれていたと思います。

Q2 『リノベーションされたオフィス』を造るまでには、実際、どのような変化や体験がありましたか……。



右：天井を抜くことで生じる高さのあるスペースは、開放的で大胆な空間を作りだし、働く者に安らぎと集中力をもたらします。

左：カフェで仕事をしているかのような印象を思い起こす心地よい空間は、コンピューターに向かう時間が長い仕事だからこそ必須なものとなります。

**起業して1年、夢を絆の糧とした。
突然、舞い降りたコウノトリが
産み落とした卵は、長年の想いを叶える
創造的で、挑戦的な事業企画だった。
十分ではない資金と有り余る情熱を抛りどころに
揺籃となる新天地の選択が始まる。
いちから「オフィスを造る」ことは
無から事業を創造する行為によく似ている。
「オフィスが人を創る」と念じた大航海が今、始まる。**

風水オフィスを訪ねて

東京都中央区銀座 株式会社バンハート

倉庫に使用されていた場所が新しい事業の出発点になると決まった日
会社の命運を未来に託す起業イメージとリアルなオフィス像が目映った…。

FENG-SHUI Interview

Q1 『風水オフィス』に出会ったきっかけとは、何だったのでしょうか……。

「私の話を疑って、疑って、疑ってみてください。そして、最後に疑うものがなくなったら、それは真実に近い話ですよね……」。この逸話は、6年程前のことになりましたが、私が初めて松永先生にお会いしたときに、別れ際に先生が私に投げかけた最後の一言です。

当時、私はフリーの出版プロデューサーをしていて、ある企業の依頼で松永先生の著書を作ることになり、「密教」や「修験道」、「風水」などに興味があった私は、二つ返事でこの仕事を受けました。年末の2日間を費やしてインタビューした原稿を元に、『松永ワールド』のエッセンスを一般人向けに出版するという企画ものでしたが、アンカーで頼んだ著名なライターが書いてきた原稿が的外れで、私が自分ですべての原稿を書き直した苦い思い出と共に、今も深く心に残る作品でした。

『ドラエゴ(ドラゴン・エゴイスト)』とタイトルが付いたその本は、1万部を1年で完売しましたが、残念ながら余り世間的には話題になることもなくその後、絶版になりました。

私は、かつて大手出版社の編集者として名を馳せていた時期もありましたが、80年代にインターネットに出会ってからは、「夢にまで観た」未来の出版社の姿を追い求めて、周囲の反対を振り切って出版界からIT業界に転身し、松永先生と出会った頃は、『ITバブル』がちょうど崩壊し、どん底の境遇を彷徨っていました。

まさに「ジェットコースター」に乗ったような人生で、出版社を辞めた頃は前妻や子供たちを手放すような生活で、それでも、何度も「同じ夢」を観た実感が忘れられず、友人たちからは『ドリーマー』と渾名をつけられるほどに正気を失ったかのように見えていたようです。

そのような時に松永先生と出会えたことは、今でも「幸運」だったと信じています。インタビューで聞いた一言一言が、その後の人生の支えになり励みになり、「この仕事をしていて良かった」と自分が選んだ人生に少しだけ自信を取り戻せたような気がしました。何度もその著書を読み返しては、「いつか自分も風水でオフィスを作るぞ」と念じた記憶がいまも鮮明にあります。

Q3 『風水オフィス』に入所されて、どのような変化や周りからの反応がありましたか……。

ロンドンのソーホーにあるようなベンチャー企業の事務所をイメージしてお願いした「デジタル・ハウス」と「本社」が次々に開設され、ビル・オーナーがそれまで倉庫代わりに使っていた空間は一変しました。

目の前のビル1階にある老舗「コロッケ」店の店主が「今まで誰も寄りつかなかったビルに、どんな人が越して来るのか」と思っていたんだ……と夕暮れどきに暖かみのある照明の光を見つめながら話してくれた一言が、そのすべてを物語っていたと感じています。

次に、ビルのオーナー会社から端正な蘭の鉢植えが届きました。その白い花びらの一枚一枚がスタッフの純粹な想いと静かな意気込みを象徴しているかのように思えたほど、感動的な事務所開きとなりました。

「ケルザイム」というエコ素材を応用した塗り壁材「ダイヤモンドマス」を全室に塗布したことで、それまでカビ臭かった室内が一掃され、空間の空気感がまったく変わってしまったことに、訪れる顧客の方々や出版社の人たちだけでなく、「エコと健康」の統合を願った私自身もびつくりしました。

私たちの仕事は、究極の「専門技術集約型事業」の一つでもあるのですが、社員よりも委託先出向者やデザイナー、エディターなどのクリエイターやエンジニアの人の数の方がはるかに多い業態で、彼ら自身が喜んで働いて頂ける場を提供するのも私たちの仕事の大きな責務なのだと思います。実際、彼らが怖々と初めて出社してきた日のことは、一生涯忘れられない記念日となりました。

私に次々と挨拶に来て、「良い事務所を作ってくれてありがとう」と言ってくれたのです。この思いがけないスタート劇が、その後の事業運営上の難局や困難な課題を一体となって突き破ってくれる信頼の絆となっていたのだと気づいたのは、少し時間が経ち冷静な日々を取り戻してからのことでした……。この素晴らしい事業と仲間を決して諦めずに、ここまで来ることができたのは、松永先生とそのスタッフの皆様の温かい眼差しと励ましがあったからだと感謝しています。これから、いよいよ恩返しができる時期に入る予感が今、しています。